

---

# サヨナラ。

亜純 玲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

サヨナラ。

### 【Zコード】

Z6514A

### 【作者名】

亜純 玲

### 【あらすじ】

（旧コナン・ノベルズで連載していたものを短編にしました）突然かかるてきた一本の電話。それは何週間ぶりかに聞く愛しい人の声。だが、それは悲しく苦しい言葉を聞かされることになるのだ。

(前書き)

旧「ナンノベルズ」で連載していたものを短編にしました。  
前編と後編に分かれています。

今も昔も想つている

だからサヨナラ

世界で一番大切な人

それは本当に突然のことだった。

『よお、蘭。元氣か?』

「新一！あんたねえ、連絡くらじよこしなさいよつ……！」

何週間ぶりかの新一からの電話。

嬉しくて溢れそうになる涙を堪え、私はいつもの憎まれ口を叩いた。

昔は日常茶飯事だったこの会話は、今は新一から電話がくる時でし

かすることができない。

電話越しでしか聞くことができない新一の声に懐かしさを感じながら、私達はしばらく他愛のない話をした。

「ねえ、新一。春には戻つてこれる?」

『え?』

一瞬、困つたような声を聞きながら、私は拗ねたような声をだした。  
「ほら!毎年、新一と自転車で行つてたじゃない。秘密のお花見場所!」

『ああ・・・・・オメーがよく坂の途中でバテてた、例の場所ね』  
「な、なによ!昔の話でしょ?それより、また行こりよ。たまには帰つてきて・・・・・ね?』

今年も一緒に行けるよね、といつ願いを込めて発した言葉に、受話器の向こうの新一は黙つたままだつた。  
やつぱりダメか、と心の中で密かにため息をついた。

これ以上困らせてはいけないとわざと明るく口を開こうとした時、いつになく重々しい口調が響いた。

『蘭・・・・・もう、待たなくていいから・・・・・』

「え?』

耳に入つてきた言葉が信じられず、全ての思考が止まる。

混乱している私に言い聞かせるように、新一は言葉を続けた。

『いつ帰れるかわからんねえのに・・・・・ずっと待たれてても迷惑なだけだしな。』

「ちょ、ちょっと待つてよ!待つてくれつて言ったの、そつちでしょ!?それなのに・・・・・急に何よ!私は・・・・・私はずつと待つてようと・・・・・』

『・・・・・だから!もう別に待たなくてもいいつってんだろ!?オレ達はもともと・・・ただの幼馴染みなんだからな!-』怒鳴つた新一の言葉に、胸がズキリと痛む。

・・・ただの幼馴染み。

それはわかっているつもりだつた。  
だけど・・・・「待つていてくれ」と言われて・・・・期待して  
た。

少しばかりのことを特別だと思つていてくれてゐるんぢやないか、と。  
でも・・・・新一にとつて私は・・・・やつぱり、「ただの幼馴染  
み」だつたんだ。

「そ・・・・・だよね・・・・・私・・・・・新一の幼馴染みだもんね。  
待つてられても迷惑・・・・・だつたよね・・・・・ゴメン・・・・・

それだけ言ひのなか精一杯たつた後から後から涙が溢れて、泣き声を聞かれないように声を殺していく。

『……………あ、オレ…………もう行かなべくまひ』

何だか新一が遠くに行つてしまつよつた予感がして、私は慌てて涙声のまま呼び止めた。

「し・・・・んいち・・・・・・?新一!」

消え入りそうに小さな声だつたけど、ハツキリと耳に届いた言葉。その言葉に強い不安を感じて、何度も名前を呼んだけれど・・・・・

けだつた。

「バカツ・・・・・ツ・・・・・新一の・・・・・ばかつ・・・・・」  
・ヒツク・・・・・・・しんいちい・・・・・・・」

涙が止まらない。力が抜け、私はその場に座り込んだ。

握りしめた、新一からもらった携帯からは冷たい金属音が流れつづけていた・・・・・

あれから三ヶ月。

新一からの連絡は、あの日からブツツリと途絶えてしまつた。そしてコナン君も・・・・・

阿笠博士の話だと、新一から電話が会つた日と同じ日に両親が迎えにきて急に出発してしまつたらしい。

落ち着いたら連絡をする、と言つていたらしいけれど・・・・・三ヶ月経つた今でも、コナン君からの連絡はない。

でもそれを不思議には思わない。  
知つていたから、確信したから。

「コナン君は、新一だつて。

何か大きな理由があるのはわかつていた。

それを言つてくれない彼にすごく腹が立つたし、寂しかつた。

だけど・・・・・新一が待つていてほしい、と望んでくれるなら・・

・・・私は黙つて、新一が帰つてくるのを待つていようと決心して、何も言わずにいたのに・・・・・

「・・・・・ひどいよ・・・・・・

幼馴染みだと思われていてもよかつた。

「待つていてほしい」の言葉で、強くもなれた。  
もしもいつか・・・・・

コナン君がいなくなる時には・・・・・「サヨナラ」と。

新一が帰つてきてくれる時は・・・・・「オカエリナサイ」と  
言いたかつた。待つていたかつた。

・・・・・それなのに・・・・・

「・・・・・待たなくともいいなんて・・・・・ひじかぎるよ・・・・・

「 呟いた私の言葉に、気づく人は誰もいなかつた。

「 ら～ん！～さつきの店員さん、いいと思わない？」

「 そう？」

「 うんうん。すつごくイケメンつて感じ！」

近頃元気のなかつた私を心配して、園子が連れてきてくれた新しい  
喫茶店を楽しんだ後、私達は人通りの多い道を進んでいた。  
すっかり温かくなり、春の気配が近づいている街を見渡しながらふ  
と、私はあの桜のことを思い出した。

小さい頃、新一が教えてくれた秘密の場所。

その小さな丘の上に一本だけ立つた桜は、どこかの桜よりも早く咲いて、その桃色の花の枝を伸ばしていた。

今年は結局、一人で見ることになるかな・・・・と小さくため息を  
つくと、ふと目の前を小さな桜色の花びらが落ちていった。  
こんなところに桜？ そう思つて、あたりを見渡した私は驚いてその  
足を止めた。

「 ? じしたのよ、蘭？」

「 ゴメン、園子！～先に帰つてて！～」

「 えつ！～ちよつと！～」

後ろの方に園子の声を聞きながら、私は人込みを搔き分けて走つた。  
見間違ひじゃない。一瞬だつたけど、あの後姿は・・・・・！  
しばらく走つてその姿を確認し、私は思いつき腕をつかんだ。

「 新一！～」

新一が驚いたような表情で、私を見つめた。

嬉しさと驚きでグチャグチャになつていく頭で、私は必死で言葉を探した。

だけど、口から言葉が出る前に涙が溢れて・・・・・

「ばかっ・・・・・！どこ行つてたのよ・・・・・っ！・・・

やつと出でてきたのは、そんな言葉だけだった。

人前にも関わらず泣き出してしまつた私を困つたように見つめ、新一はそつと私の頭をなでた。

昔と変わらない、その仕草。

私が泣いているといつもそうやつてなぐさめてくれた。

まだ幼馴染みという関係までが変わつてしまつていないことによしホツとした私の耳に届いたのは、信じられない言葉だった。

「ゴメン・・・・・君、誰だっけ・・・・・？」

何もかも吹き消すように、

春の強い風が間を通り抜けていった。

ありがとう

今まで支え続けてくれた人

そしてサヨナラ

「ええ。その通りよ。江戸川コナンは正真正銘、工藤新一本人よ。」  
美人で知的そうな、赤みがかかった茶髪の女性はきつぱりと言った。

街中で偶然再会した新一は、私のことや自分のことまでも忘れていた。

何か事情を知っている様子だった阿笠博士をたずねて問い合わせると代わりに隣でコーヒーを飲んでいた、灰原哀だと名乗る大人びた女性が全てを話してくれた。

新一がある組織に毒薬を飲まされ、子供になってしまったこと。

自分と関係ある人が巻き込まれることを恐れ、江戸川コナンとして正体を隠し続けていたこと……

そして、三ヶ月前……ついにその組織のアジトを見つけたこと、全てを。

「何とか工藤くんの機転のおかげで、組織の大半はつぶすことができたわ。だけど……その代償は大きかった。」

一旦言葉を切り、彼女……哀ちゃんは少し辛そうな表情を見せた。

「アジトを爆破する際、工藤くんは自殺を図った組織の人間を助けたのよ。幸い、二人とも命は助かつたけれど……工藤くんは重症を負い、しばらく生死の境をさまよったわ。そして目覚めた時、彼は……記憶を失っていたの。」

その場に重い沈黙が流れる。

あまりのことに何も言えないでいる私から目をそらし、哀ちゃんはうつむいた。

「…………『めんなさいね。』

「え？」

「私があんな薬を作らなければ……工藤くんは……」

・

そうか、哀ちゃんは……新一を小さくした薬を作った、張本人なんだっけ……

張り詰めた表情を浮かべるのを私は思わず抱きしめた。

驚いて顔を上げる彼女と視線を合わせ、私は静かに首を振った。

「あなたが悪いわけじゃないわ。それに、新一と一緒に戦っていた人を……私が責めることなんてできないよ。」

「蘭さん……」

「新一も……記憶はないけど、ちゃんと生きて帰つてきてくれたし……」

そう、新一は約束を守ってくれた。

私のことを忘れてしまったことは悲しいし、寂しいけど……。それでも、「生きて帰ってきてくれたこと」がすごく嬉しかった。

『…………サヨナラ……………』  
らん……………』

最後に聞こえたあの言葉がよぎる。

新一は、本当に死ぬかもしれないと覚悟していたんだろう。だから、待つていなくともいいって私に告げて……黙つて消えたんだ。

新一は、優しいから……………  
(でも、私…………待つていたかつたんだよ?)

新一の優しさをひどい、と思ったのは…………初めてだった。

「…………やつぱり、あなたには敵わないわね……………」

「?」

静かに呴かれた言葉に我に返ると、哀ちゃんは大人びた微笑を浮かべていた。

「蘭さん。工藤くんはケガによるショックで、一時的に記憶を失っているだけ…………リラックスできる状況を作つてあげれば、数日で元に戻るらしいわよ。」

「ほ、本当ですか!?」

「ええ。だから私たちもなるべく彼がリラックスできる状況を作ろうとしていたんだけど…………やつぱり、あなたがいないとダメみたいね。」

彼女が何を言いたいのかよくわからず、首を傾げると、哀ちゃんは面白そうに笑った。

「工藤くんが生死の境をさまよっている時…………彼、うわ言で何て言つてたと思う?」

「え？ 新一は何で……？」

「『蘭……』『めん……泣くな』って、そればかり繰り返していたの。」

「…………本当…………ですか？」

新一が、私のことを…………？ そうたずねると、哀ちゃんはゆっくりと頷いた。

「彼にはあなたが必要なのよ。だから、きっと…………工藤くんの記憶を取り戻せるのも、あなただけのはず。…………彼の側に、いてあげてちょうどいい？」

「哀ちゃん…………」

「…………志保。」

彼女は静かに微笑んだ。

「今は、阿笠志保…………よ。」

「…………志保さん、ありがとう。」

返事の代わりに、志保さんは照れたように頷いた。

温かい風が、耳元を通り抜けていく。  
それを直に感じながら、私はひたすら急な坂道を自転車を押しながら上り続けた。

「蘭さん。どこ行くんだよ？」

「いいから。ついて来ればわかるよ。」

同じく自転車を手で押し、私の後ろを歩く新一に声をかける。

昔と変わらない坂のきつさには閉口したけど、何とか一番上までたどり着くことができた。

「ふう・・・・・やつと着いた・・・・・」

「結構、きつい坂道だな・・・・・大丈夫?」

「うん、平気。それよりもここに自転車置いて。ここから先は、歩いて行かないといけないから。」

ここらは滅多に車も通らない道路。

だから人に見られる心配もないし気がつかれにくいので、立ち入り禁止と書かれた柵を乗り越えて芝生に入るのは、小さな子供にもできる簡単なことだった。

手招きをすると、新一は大人しくそれに従つた。

「・・・・・オレ、ここ知ってる気がする・・・・・」

道路から丁度死角となる位置まで芝生を横切つていると、新一がそうポツリと呟いた。

「うん。新一と一緒に毎年お花見に来てたんだよ?」

「お花見・・・・?こんな芝生で・・・・?」

「・・・・そう。新一が教えてくれた、秘密の場所。」

ザアッと風がなびき、それと共に桜の花びらが目の前を通り過ぎた。それと同時に、芝生の小さな丘の上にある立派な桜の木が視界に飛び込んできた。

昔と変わらない、たつた一本の桜の木。

満開の淡い桃色の花を咲かせ、風になびいては舞い散つていく綺麗な花びら。

「こんなところに桜が・・・・・」

「綺麗でしょ?ここからだと、町も見えてすぐ見晴らしがいいんだ。」

うんと背伸びをして、桜の木の下に立つ。

緑の芝生を花びらがピンク色に染めていた。

「桜の絨毯、だな・・・・・・・・

ポツリ、と呟いた新一に思わず笑いがこみ上げてきた。

「くすり

「? 何で笑う?」

「だつて新一、前も同じこと言つてね。私が「かつこつけ。」って言つたら、拗ねちゃつたの思い出して・・・・・・・

そう言うと新一は、少しむくれたような顔をした。

懐かしい、昔と変わらないその表情。

「よかつた・・・・・今年も・・・・・」に来れて・・・・・・・

気がつくと私はそう呟いていた。

本当は、もう新一と見れないんじやないかと思つていた。

二度と、帰つてこないんじやないかと思つていた。

新一のほうを見ると、ビニが遠くを見るような目で桜を見上げている。

また風が吹き、桜が舞い散る。

思わず、ドキリとした。

そのまま新一まで消えてしまいそうな気がして・・・・・私は思いつきり抱きついた。

新一が驚いたような顔で、私を見つめる。

「「」、「ごめん・・・・・」

「こや・・・・・・・ビニした?」

心配そうに覗き込む目は、ずっと側にいてくれた小さな男の子の目と同じで・・・・・私の大好きな、変わらない真実を捜し求める目。・・・・・なのに、今ここにいる新一は、私の知っている新一じゃない。

まだ、彼は完全に帰つてきたわけじゃない。

今的新一に、オカエリナサイとは言えない。

いなくなってしまったコナン君に、お礼とサヨナラは伝わらない。

「…………泣くな。」

「え？」

そつと新一の手が頬に触れる。ようやく私は、自分が泣いていることに気がついた。

慌ててそれを拭おうとすると、その手を新一がつかんだ。いきなりの行動にわけがわからず反応が遅れた私は、ゆっくりと重ねられた温かいものを唇に感じた。

その場の時間が、全て止まってしまったようだった。やがて名残惜しそうに唇が離れ、再び時間が流れ出す。まだ呆然としている私を新一が強く抱きしめ、そつと耳元でささやいた。

「…………蘭に泣かれると…………辛い…………」

「しん…………い…………ち…………？」

聞きなれた、懐かしい口調。まさか、と思つて感る感るたずねた。

「本当に…………新一…………？」

「ああ。」

「…………私のこと…………覚えてるの…………？」

「ああ。」

「…………帰つてきて…………くれたの…………？」

「ああ。待たせて…………ゴメン。」

新一の言葉に、私は今まで堪えていたものが溢れ、ただ新一の胸を叩いた。

「バカバカバカツ！――待つてろって言つたり、待つていなくともいいくつて言つたり！――どっちなのよ、バカツ！――」

「ひどいよ…………あんな」と言つて、勝手にいなくなつて……

私、新一を待つていたかったのに……。コナンくんにまだ何も言つてないのに……。」

「…………氣付いてたのか…………？」

当たり前でしょ？何年一緒にいたと思ってるの？バカにしないでよね。

そう言おうと思つたのに、涙が後から後から溢れて何も言えなくなつてしまつた。

泣きじやぐる私の頭を新一がそつとなでてくれる。

じばりく泣き、よつやく落ち着いてきた私を新一が覗き込んだ。

「本当は、蘭に待つていて欲しかつた。帰る場所は、いつも蘭のところがよかつた。だけど…………オレだけの気持ちで、蘭を縛り付けてたくなかったんだ……」

悲しげな目で、そう新一は言った。

「だから、離れるのが一番いいと…………オレが死んだ時…………

お前の気持ちが少しでも楽になるなら、それでいいんだと…………

・

「バカッ……」

私はもう一度怒鳴り、思いつきり新一にじがみついた。

絶対にどこかへ行つてしまわないように、離れないよつ…………

強く、強く。

「お願ひだから……死ぬなんて…………言わないで…………

？」

「らん…………」

「辛いよ？待つていいだけって、すゞぐすゞぐ。だけぢ…………それで新一が帰つてきてくれるなら…………絶対に私のところへ帰つてきてくれるって言うなら…………」

そう誓つてくれるなら…………

「私も絶対に…………待つてるから…………」

だから、死ぬなんて…………待たなくともいいなんて、言わないで。

最後の方は、言葉にならなかつた。

だけど新一は、痛いくらい強く私を抱きしめてくれた。

それが苦しくて、何だか嬉しくて……言いよのない気持ちで、胸がいっぱいになつた。

「…………ねえ、コナンくん。」

「…………なあに？ 蘭姉ちゃん。」

新一が少し苦笑が混じつた声で答える。

私は、今できる精一杯の笑顔を作つた。

「ありがとう、今まで側にいてくれて…………そして、サヨナラ。また…………いつか、会えるかな…………？」

「…………きつと…………会えるよ。」

新一がゆっくりと顔を上げる。

視線がぶつかり、私は少し恥ずかしい気持ちで言つた。

「…………新一…………」

「ん？」

「…………おかえりなさい。」

「…………ただいま、蘭。」

どちらともなく笑いあつた声は、春の風に乗つて桜と一緒に消えていった。

サヨナラ、今まで側にいて、支えてくれた人。

そしてオカエリナサイ。

世界で一番大好きな人…………



(後書き)

(作者よつ)

どうも、亜純玲です。  
あすみれい

久々の投稿です。良かつたら感想&評価等宜しくお願いします。w

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6514a/>

---

サヨナラ。

2010年11月15日18時43分発行